

日本語学習者の意見文執筆プロセスにおける情報活用

Information Use in the Argumentative Essay Writing Process of Japanese Language Learners

楊秀娥
中山大学

要旨

日本語ライティングにおける情報活用のプロセスを明らかにする研究は、まだ十分に蓄積されていない。本稿では、日本語学習者がどのように情報を獲得し、それをどのように選択・取り込んでいるのかを明らかにすることを目的とし、ライティング授業の開始時に行った意見文の執筆過程および授業終了時の修正過程を記録したデータを分析・比較した。その結果、①情報活用の目的が多様化し、その目的に応じて複数の情報源を連動させ、情報を比較・照合する利用が顕著になったこと、②情報源の範囲が広がり、より多様なツールを使い分けるようになったこと、③情報活用の効率面において学習者間に一定の差異が認められたこと、という3つの特徴が示唆された。これらの分析結果を踏まえ、学習者の情報リテラシーを育成するためには、生成 AI の仕組みを理解し、主要な学術データベースの特徴を把握したうえで、プロンプト設計、検索キーワードの精選、検索条件の工夫などの検索スキルを高めること、また、生成 AI や AI 翻訳の利便性を前提としつつも、それらを限定的かつ補助的に活用する方略を明確に位置づけることが求められると指摘した。

キーワード：

日本語学習者、情報活用、日本語ライティング、執筆プロセス

1. 研究背景と本研究の目的

2022年以降、自然言語処理技術を基盤とした大規模言語モデル（LLM）が相次いで登場した。中でも、自然言語による対話が可能な生成AI（Generative artificial intelligence: GAI）は注目を集め、教育現場に大きな影響を及ぼしている。2025年現在、教育現場でGAIの使用を全面的に禁止することは現実的とは言えず、その使用の可否をめぐる議論から、実際の活用場面においていかに効果的に活用するかという点により関心が向けられており（文・梁2024）、教育現場全体がその対応を模索している（谷野2025）。特に、第二言語ライティングにおけるGAIの活用は広く議論されている。

第二言語ライティングに関する研究においては、GAIは、アウトライン作成、文法・文体・文章構成の改善、内容修正、執筆後の振り返りなどにおける可能性（Su 他 2023）が認められている一方、生成内容に関する懸念も多く指摘されている（青山 2024）。例えば、虚偽の参考文献や不正確な情報を生成するハルシネーションのリスク、人間と GAI の様々な形での「共著」の許容度（大工原 2024）、GAI に過度に依存し、その出力を批判的に評価せずに文章に取り入れてしまう盗用の助長、学習者の批判的思考能力の発達阻害（Zou & Huang 2024）などが問われている。このように、GAI による情報の活用には一定のリスクが伴っている。したがって、デジタル時代における第二言語学習者にとって、GAI などの情報源から適切な情報を獲得し、正確に理解・評価し、自身の論旨に即して再構成する力は、単なる言語運用能力を超えて、思考の論理性・新規性を支える重要な基盤となる。

本稿では、GAI をはじめとする情報源から得た情報の活用に着目し、日本語学習者はどのように情報を獲得し、それをどのように選択・取り込んでいるのかを、日本語による意見文執筆プロセスの分析を通じて明らかにする。その結果を踏まえ、日本語ライティング教育への示唆について論じたい。

2. 日本語ライティングにおける情報活用

情報活用に関する研究は、従来、主としてWeb検索における検索行為や検索態度を対象として行われてきた(吉岡2007、山本他2020など)。しかし、日本語ライティングに特化した情報活用に関する研究は必ずしも多くない。佐渡島(2014)は、日本の小・中・高・大学と受験塾において、情報を自分の文章に取り込むための十分かつ一貫した指導がなされていないことを指摘し、学習者に「情報を再定義させる」学習をさせることの必要性を指摘している。

また、2022年以降、第二言語ライティングにおけるGAIの活用が広く議論されている一方で、日本語ライティング教育における実践的知見はまだ限られている。例えば、大島・石毛(2024)は、日本語上級者の中国語母語話者大学院生3名を対象に、AI無しおよびWeb/AI有りの状況下で600字程度の文章課題遂行を比較し、AI出力と自己の文章のつなげ方には学習者間で個別性が見られ、Web/AIの使用が必ずしも課題の容易化につながらないと指摘している。福山(2025)は、GAIのリポート執筆への利用経験の有無による授業開始時の認識の差を調査し、経験者はGAIを文章添削や情報収集など補助的に利用していたことを報告している。さらに、李他(2023)は、日本語学習者の意見文に対するChatGPTおよび熟練教師のフィードバックを量的に分析した。その結果、ChatGPTのフィードバックと熟練教師のコメントの多くが一致している一方で、ChatGPTは文の正確性や構造に関してより詳細なフィードバックを行い、文法的な正確さや語彙使用の適切性に焦点を当てているが、熟練教師は学習者の執筆意図を踏まえた、文章全体の構成やオリジナリティを重視したフィードバックを行っていた点が明らかになっている。

さらに、GAIを活用したライティング教育実践や、その実践過程における学習者の様相についても、報告が蓄積されつつある。青山(2024)は、学習者をスクリーンから離す実践として、GAIと拡張技術を併用した日本人移住者へのインタビュータスクを設計・報告し、言語学習におけるテクノロジー利用の利点と限界を考察している。大工原(2024)は、GAIをもう一人の「クラスメート」と位置づけた文章表現の授業実践を報告し、その活用が履修者の文章表現能力の向上や「大学での学び」の本質に迫るうえで有益であることを論じている。また、甘利(2024)は、10歳の日本語学

習者1名を対象にGAIを活用した日本語作文教育を行い、学習者の作文プロセスの変容、言語能力の向上、動機づけと自己効力感の向上、総合的な日本語能力の向上を確認している。楊他（2025）も本稿で対象とする実践事例を基にしているが、意見文執筆プロセスを分析する本稿とは異なり、受講者へのインタビューを通して、日本語アカデミック・ライティングにおけるAIツールの活用実態を、Webリソースの比較を交えながら分析している。

これらの先行研究は、学習者の認識（福山 2025）、執筆過程と執筆意識（大島・石毛 2024）、フィードバック（李他 2023）、教育実践およびその過程における学習者の様相（青山 2024、大工原 2024、甘利 2024、楊他 2025）など、多様な観点からライティングにおけるGAI活用を明らかにしており、日本語ライティングにおける情報活用を理解するうえで有益な知見を提供している。ただし、いずれの観点においても研究数は限られており、学習課題・学習環境・学習者特性による個別性と共通性の解明は十分に進んでいるとは言いがたい。こうした状況を踏まえ、本研究は学習者の執筆プロセスにおける情報活用を質的に検討する試みとして位置付けられる。具体的には、アカデミック・ライティング教育を受ける前後に行われた意見文の執筆過程を質的に比較し、日本語学習者の情報活用の変化およびその問題点を明らかにすることを目的とする。さらに、その結果を踏まえ、日本語ライティング教育への示唆を提示する。

3. 調査方法

3.1 データの収集

本稿の分析データは、筆者が中国・広州市所在の大学において、2025年春学期に担当した「日本語アカデミック・ライティング」授業⁽¹⁾で収集したものである。本授業は、受講者が学術研究およびアカデミック・ライティングの基本知識について理解し、自らの関心に基づく研究計画書を完成させることを目的としていた。授業内容は、論文の基本構成に沿って、テーマ設定、先行研究の読み方と文献レビューの書き方、研究方法の設計と記述、研究結果と考察のまとめ方、結論の書き方を中心に展開された。また、教室内のインターアクションを重視し、ピア・レスポンスを複数回取り入れていた。さらに、その後半には、例年にはなかったGAIの活用を支援する活動を導入し、①教師によるフィードバックとAIツールによる

フィードバックの比較（宿題）、②AI活用の経験と感想のグループ共有（20分）、③プロンプト作成の説明と練習のワークショップ（40分）を実施した。

本稿で分析対象とするのは、授業開始時（1回目）に執筆された意見文（以下、初稿）およびその執筆プロセスの録画、および授業終了時（第16回）に初稿を修正した意見文（以下、修正稿）およびその修正プロセスの録画である。その際の指示内容は、表1に示した。なお、学期を通して完成された研究計画書は、授業外で長時間かけて執筆されるため、そのプロセスを忠実に記録することが困難であった。一方、授業内で短時間に行われる意見文の執筆は録画による記録が容易であり、授業前後の変化を明確に比較できる。そのため、本研究では意見文およびその執筆プロセスを分析データとして採用した。

表 1 議論文執筆の指示

回	指 示
第 1 回	以下の論題について、あなたの意見を述べてください。 大学教育は、教養教育（リベラルアーツ教育）と専門教育のどちらに重点を置くべきか。 注意事項： ・日本語で 800 字程度の意見文を書いてください。 ・生成 AI に任せて、文単位以上の作成を依頼しないでください。 ・1 つ以上（1 つを含む）の資料を引用してください。
第 16 回	皆さんは第 1 週に、上記の論題と注意事項に基づいて各自の意見を書きました。今回は、学期を通して学んだアカデミック・ライティングの知識を使って、その意見文を修正してください。Before（1 週目）& After（16 週目の修正）に書いた意見文の比較を通して自身の学びを実感することがねらいである。

データは、調査目的、収集方法、研究への参加および撤回の自由、個人情報や研究データの取り扱いなどの事項を説明したうえで、受講生から書面による同意を得て収集した。初稿の一部の録画が不完全であったため、全受講者8名のうち3名（JL1～JL3）の初稿、修正稿およびそれぞれの執筆録画資料を、本稿の分析対象とする。調査協力者JL1～JL3は、いずれも中国語を母語とする学習者である。大学1年次から日本語を専攻として学び始め、当該授業の履修時点では大学3年次の後期に在籍しており、JLPTのN1、または中国国内の日本語専攻四級試験に合格している。

3.2 分析方法

収集した意見文の初稿と修正稿は、それぞれの執筆プロセスの録画と併せて、調査協力者としての受講者がどの程度情報を取り込んでいるかを判断するための資料として用いた。一方、執筆プロセスの録画データについては、情報源ごとの利用状況を把握するため、①時間帯、②閲覧先、③執筆者の検索／指示内容、④検索画面または出力画面のスクリーンショット、⑤執筆内容（第1回）／修正前→修正後（第16回）の5項目をExcelに記録し、データ化した。この作業は、筆者を含む2名の研究者によって行われた。例えば、JL3が修正作業を行う際に、開始から22分51秒後から23分47秒後までの間に、DeepSeekに『『激しく発展する』は正しい表現ですか』と入力し、その出力を読んだうえで、「各産業が激しく発展しており」という句を「各産業が急速に発展しており」に修正した。このケースの場合、上記の①～③および⑤は、それぞれ「22:51-23:47」「DeepSeek」「『激しく発展する』は正しい表現ですか」「『激しく発展し』→『急速に発展し』』としてデータ化した（④出力画面のスクリーンショットは省略）。なお、修正が伴わない場合には、⑤の項目を記録しなかった。

本稿では、情報源をさらに表2のように、GAI、AI翻訳、データベース、Webという4種類に再分類した。また、情報活用の目的については、上記の分析項目③の分析結果に基づき、「言語」と「論証」の2項目をまず設定した。そして、論証に関してはさらに「証拠」「推論」および論証の前提となる「概念」に細分化し、情報活用の目的を識別した。

表2 ライティングにおける情報源の分類

情報源	例
GAI	ChatGPT、DeepSeek、Doubao、ERNIE Bot（文心一言）など
AI 翻訳	DeepL、Google 翻訳、Grammarly、百度翻訳、MOJi 辞書（AI 搭載）など
データベース	CiNii、J-Stage、CNKI（中国知網）、Google Scholar など
Web	Microsoft Bing、Google、ウィキペディア、百度百科など

4. 分析結果

4.1 受講者の情報活用の概要

3名の調査協力者（JL1～JL3）による初稿および修正稿の情報活用状況を表3にまとめた。3者に共通して、修正段階において情報活用の目的や情報源の幅が拡大し、初稿に比べてより精緻で多面的な活用が見られた。JL1は、初稿ではGAIを中心に推論・証拠の補強を図りつつ、MOJi辞書によるAI翻訳を多用していたが、修正稿では英語資料を含む多言語情報を取り入れ、Tencent CloudやPDF翻訳など複数の翻訳ツールを柔軟に使い分けるなど、情報理解と表現生成を支える利用へと発展していた。JL2は、初稿でGAIとWeb検索を用いて推論や証拠の補強を行っていたのに対し、修正稿では「教養教育」など論題に含まれる概念の明確化を目的として、所属大学の図書館データベースをはじめ、より学術的で信頼性の高い情報源を用いる方向に転換した。JL3は、初稿では推論の補強のみを目的としたが、修正稿ではDeepSeekを用いて推論を補強し、コロケーションや文間のつながりといった言語表現の改善に情報を活用していた。

表3 調査協力者による情報活用のまとめ

目的 情報源 執筆者(稿)		言語	論証		
			前提	証拠	推論
JL1	初稿	AI 翻訳	データベース	GAI	GAI
	修正稿	AI 翻訳	-	GAI + Web	-
JL2	初稿	-	-	GAI / Web	Web
	修正稿	-	データベース/ Web	-	-
JL3	初稿	-		Web	Web / GAI
	修正稿	GAI			GAI

4.2 JL1 の情報活用

JL1 は、初稿執筆の際に言語面と論証面の両方に関する情報を利用していった。言語に関する情報活用は、すべて MOJi 辞書を用いた中国語から日本語への翻訳であった。具体的には、プロンプトに使用しようとする「人間の全人的な発展」（原文は中国語）を日本語に訳した 1 回を除き、他の 8 回は、GAI の中国語出力をそのまま、または軽く書き換えて日本語に訳していった。「学問の境界を打ち破る」「異なる学問分野の理論や見解を学び・分析することを通して、学生は論理的思考力や批判的思考力などを鍛えることができる」（原文は中国語）など、句や文レベルの翻訳利用が見られた。論証に関しては、概念、推論、証拠に関する情報活用はそれぞれ 1 回観察された。JL1 は、論題に含まれるキーワードの意味を確認するために、データベース CNKI で「教養教育」（原文は中国語）と入力し、一般誌掲載の論文を 1 本開いて 1 分半程度読んだが、取り入れなかった。GAI の Doubao で「一般教養教育はなぜ人の全面的な発展に役立つか」と質問し、その出力を参考に「一般教養教育は様々な分野の知識を含めて」「専門知識以外の美学、文学など他の分野の知識に触れる」と記述した。また、Doubao に「世論によって判断を失い、他者に被害を与えた例を挙げてください」（原文は中国語）と入力し、出力された 5 つの例から 1 つの選び、中国語でまとめ、MOJi 辞書で翻訳をして「例えば武漢で糖水を売っているおじいさんは、ネット上で食品安全問題を捏造されたため、閉店を余儀なくされた」と文章に取り入れた。

最終回（第 16 回）で初稿を修正する際に、JL1 は、言語面および論証面における証拠に着目して情報を利用していた。翻訳機能は初稿同様に活用され、3 回は推論を補強するために追加したい内容を Cider で中国語から日本語へ、2 回は証拠を探すために英語論文を読む際には、Tencent Cloud を用いて英語の句を中国語に、Microsoft Edge に内蔵される PDF 翻訳で複数の英語段落を中国語に翻訳していた。一方、論証に関しては、証拠が求められた。JL1 は、自分の文章の証拠を充実させようと努め、DeepSeek に「一般教養教育は思考力を高めることができるという論点に資料あるいは例を挙げてください」と入力した。提示された事例・論文・数値データの出典を GAI および Web で何回も検索してみたが「失敗」が繰り返され、最終的に 1 つの証拠を採用した。この修正は、情報源の変化によって①GAI での検索、②Web での再検索、③Web での独自検索の三段階に整理できる。

修正は約 30 分（全修正時間の約 2/3）を占め、証拠の精度を高めようとした意識がうかがえる一方、GAI の出力を前提として検証作業を繰り返していたため、時間を比較的多くかけたにもかかわらず、成果に結びつかない情報利用が多く見られた。

① GAI での検索

JL1 はまず DeepSeek に「一般教養教育は思考力を高めることができるという論点に資料あるいは例を挙げてください」と入力した。出力内容の出典確認を DeepSeek 内で試みたが、提示されたリンクはいずれも「ページ未検出」と表示され、有効な情報は得られなかった。

② Web での再検索

DeepSeek の出力の一部を Microsoft Bing で検索したが、意図に合う内容は見つからなかった。さらに、DeepSeek が示した英語論文を Web 上で再検索し、翻訳 AI で中国語に訳して内容を確認したものの、DeepSeek に提示された数値データは確認できなかった。

③ Web での独自検索

Microsoft Bing で「教養教育が学生の思考力を高める事例」（原文は中国語）と検索し、ある教師のインタビュー記事を見つけて閲覧した。その中から 1 文を抜き出し、サイドバー機能で日本語に訳して自分の文章に取り入れた。

初稿と修正稿を比較すると、JL1 の情報活用に以下の特徴が見られる。第一に、翻訳ツールは MOJi 辞書から Tencent Cloud、Microsoft Edge に内蔵される PDF 翻訳、Cider 翻訳など多様な翻訳ツールへと移行し、目的や文脈に応じて柔軟に使い分けるようになった。そして、初稿においては「中国語→日本語」の翻訳を利用し意見文を執筆していたのに対して、修正にあたり、読む際には「英語→中国語」「日本語→中国語」、書く際には「中国語→日本語」「英語→日本語」というように、英語による情報が新たに加えられ、情報理解と表現生成の両方を支える形で翻訳機能を活用するようになった。第二に、情報検証の姿勢が強まった。初稿では、推論強化および根拠提示といった目的ごとに GAI や Web などの情報を単独で利用する傾向が強かったのに対し、修正においては、複数の情報源を連動させ、同一の修正目的に向けて情報を比較・照合する利用が増加した。しかも、

Web 情報を参照する際には出典 URL を明示するようになった。一方、修正稿においても、GAI の出力をそのまま信頼し、繰り返し検証を試みる様子が観察され、情報検索の非効率化が見られた。

4.3 JL2 の情報活用

JL2 は、初稿において論証に関する情報のみを利用しており、証拠および推論に関する情報活用がそれぞれ 1 回ずつ観察された。論証の証拠を得るために、JL2 は、DeepSeek に「教養教育が一般的な大学教育より優れている点を示す例を 3 つ挙げてください」（原文は中国語）と入力したが、出力されたのは「学際的統合能力」「批判的思考力とコミュニケーション能力」「長期的な適応力と生涯学習力」（原文は中国語）といった抽象的な三点であり、望む具体例ではなかった。その後、「もっと具体的な例を教えてください」（原文は中国語）および「教養教育を受けた著名人が、一般的な大学教育を受けた人よりも優れた成果を挙げた例を三つ挙げてください」（原文は中国語）と再度指示したが、いずれの出力も具体性を欠いており、文章には取り入れなかった。その後、Microsoft Bing で「一般教養教育」「一般教育 教養教育 違い」と検索し、ヒットした内容からある論文を開いて閲覧し、本文中の「表 3-単位数の増減と偏差値」に注目し、自らの意見文に「北海道大学の統計からして見れば...」と記述し、出典を明示して引用を補っていた。また、推論の強化が見られたのは、次の Web 情報活用の事例である。JL2 は、まず「リベラルアーツ教育 定義」（原文は中国語）と検索し、ヒットした「教養教育」項目を閲覧し、その参考文献欄にある 2 つの大学の教養学部の紹介にそれぞれ目を通し、そのうちの一つから一部をコピーして DeepSeek に「上記の文章から、大学の教養教育が一般的な大学教育より優れている点を抽出してください」（原文は中国語）と指示した。DeepSeek の出力を参考に、「一般教養教育にくらべると、今普及していた専門教育は、その四年間勉強していた専攻が大学に入る前に決まった専攻だし...」と初稿の第 2 段落に書き込んでいた。

JL2 の修正稿においては、論証のための概念に関する情報活用のみが 1 回観察された。概念を明確にするための情報検索には、全修正時間 45 分のうち約 27 分（1:42-28:59）を費やしていた。JL2 は、まず CiNii で「専門教育」と入力し、検索結果の一覧ページのみを確認したが、個別論文を開いて閲覧することはなかった。次に、所属大学図書館ホームページにある

データベースで「リベラルアーツ教育」（原文は中国語）を検索し、郭聖涛著のある書籍の名前を見つけ、内容確認のために百度で「郭聖涛」と再検索した結果、有用な情報は得られなかった。その後、検索画面にある万方データベースおよび CNKI データベースのリンクから 3 本の論文を順に閲覧したが、いずれも引用に適した内容ではなかった。続いて、同じ所属図書館で検索語を「教養教育」（原文は中国語）に変更し、ある書籍の著者「黄坤锦」をコピーし、百度で再検索したが、ここでも有用な情報は得られなかった。その後、検索結果から CNKI リンクを開いて 3 本の論文を順次閲覧し、うち最後の論文中の定義文を参考に、自らの意見文の冒頭に「まずは一般教養教育という概念を定義します。一般教養教育とは、特定の専攻や方向の実用的人材を育てるではなく、専門家を育てる前に、各分野の総体的認識、いわば各分野の前立て教育という教育モデルである。」と加筆し、脚注で出典を明示した。このように、JL2 は複数のデータベースや Web で探索し、最終的に「教養教育」の定義を引用する形で論証の前提となる概念を明確にしていた。

初稿と修正稿を比較した結果、JL2 の情報活用には次のような特徴が見られた。初稿および修正稿ともに言語面に関する情報活用は見られず、初稿では主に論証の推論および証拠を補うために情報を活用していたのに対し、修正稿では論証の前提となる概念の探究へと利用の範囲が広がっていた。また、論証を強化するために用いた情報源は、初稿における GAI や検索エンジン中心のものから、修正稿では大学図書館のデータベースなどより信頼できる学術情報源へとシフトしていた。ただし、修正過程では論証の論題に含まれる概念を明らかにする作業に全体の修正時間の半分以上を費やしており、単純に作業時間の長短だけでは評価できないものの、大学図書館からさまざまなデータベースへ接続しながら模索するよりも、直接、常用される CiNii や CNKI などの学術データベースを活用し、さらに適切なキーワード抽出や検索条件の設定を工夫することで、より効率的な情報探索が可能になると考えられる。

4.4 JL3 の情報活用

JL3 は、初稿執筆において論証における推論を補強する目的でのみ情報を活用していた。具体的には、論証の主張を立てた後に推論部分を構成するため、2 回の情報探索を試みたが、そのうち成功を得られたのは GAI の

DeepSeek を用いた場合であり、Web 検索エンジンの Microsoft Bing を使用した際には有効な情報を得ることができなかった。JL3 は DeepSeek に「時代の発展につれて、全面性のある人材と専門型人材のどちらが求められているか」と入力し、出力された回答の一部を参照して語句や文の一部を選び取り、それをもとに初稿の第 3 段落を作成した。一方、Web 検索による情報活用は有効に機能しなかった。具体的には、Microsoft Bing で「全面性のある人材」「一般教養 人材」「人材育成 類型」「大学 人材育成」「大学で育成する人材像と大学政策」「大学で育成する人材像」「教育改革 人材育成」などの語句を順に検索したが、閲覧したページはいずれも短時間で閉じられ、初稿の内容には反映されなかった。

修正に当たって、JL3 は GAI の DeepSeek による情報を 3 回活用し、推論強化および言語表現の改善を図っていた。まず、初稿にある反駁部分の推論を補強するために、DeepSeek に「一般教養教育と専門教育との関係は何ですか」と入力し、その出力に含まれる語彙や表現を直接文章内に取り入れ、「専門教育と一般教養教育とは相互補完の関係性を持っている。専門教育を通じて、一般教養教育に得られた知識を具体化することができ、より一層深化させることもできる。」と加筆し、反駁の推論展開をより自然に整えていた。次に、副詞と動詞のコロケーションという言語表現の改善を目的として、DeepSeek に「『激しく発展する』は正しい表現ですか」と質問し、提示された修正案を参考に、「激しく発展し」という共起を「急速に発展し」と修正した。また、文章全体の終結部のつながりについて DeepSeek にフィードバックを求め、最終段落をコピーしたうえで「この段落を意見文の結論部として見た場合、どのような不足点や改善すべき点がありますか。私は、第二文が少し不自然で、話が途中で終わったような印象を与えます。しかし、私の意図としては、結論のあとにもう二文ほど加えて、テーマをさらに深めようとしたものです。」（原文は中国語）と DeepSeek に質問した。DeepSeek の提案からその表現や文型を採用し、結論部のまとまりと主題の深化を意識した修正を行っていた。

初稿と修正稿を比較した結果、JL3 の情報活用には次のような特徴が見られた。初稿では、Microsoft Bing を用いた模索的な検索を複数回試みたものの、いずれも執筆内容には反映されなかった。一方、修正稿では DeepSeek のみを使用し、具体的で明確なプロンプトを設定することで、効率的かつ

成果のある情報活用が実現していた。また、初稿では論証における推論を補強するためだけに情報を活用していたのに対し、修正稿では推論の補強に加えて、コロケーションや文間のつながりなどの言語表現面の改善にも情報を活用しており、情報活用の目的が論証面から論証面および表現面の両方へと拡張していた。

5. 考察

上記の3名の学習者による初稿の執筆および修正プロセスの分析から、日本語学習者の情報活用のあり方に関していくつかの特徴が示唆された。以下では、それらの特徴について述べたうえ、受講した授業との関連性、さらにライティング教育上の示唆について考察する。その際、意見文執筆に限定するのではなく、本稿で扱う授業の全体について受講者を対象としたインタビュー分析を行った楊他（2025）を参照しながら考察を進める。

5.1 日本語学習者の情報活用の特徴

まず、情報活用の目的が多様化し、その目的に応じて複数の情報源を連動させ、情報を比較・照合する利用が顕著であった。例えば、JL2は、初稿では推論や証拠の補強にとどまっていたが、修正稿では論題に含まれる「教養教育」などの概念探究にまで発展し、情報活用の目的を広げていた。その探究は学術データベースや Web などの情報源を用いて複数回にわたって行われており、情報源の選択と照合を通じて理解を深めようとする姿勢が見られた。また、JL3は、初稿では推論補強のみに情報を利用していたが、修正稿では言語表現面にも活用範囲を広げ、単なる翻訳や生成ではなく、具体的なコロケーションの適切さや文間のつながりについて明確なフィードバックを求めるなど、目的意識の高い利用が見られた。JL1は、初稿と修正稿のいずれにおいても言語面と論証面の両方に情報を活用していたが、修正稿では情報の検証過程がより丁寧になり、複数の情報源を比較・照合しながら出典を確認するなど、情報の信頼性を確かめる姿勢が強まり、情報活用の精緻化がうかがえた。この点は、楊他（2025）において確認された、アカデミック・ライティングにおける AI ツールや Web リソースといった情報源の利用場面の拡大、ならびに信頼性の高い情報源への移行という傾向、さらに「段階や目的に応じた AI ツールと Web リソースの使い分け、およびそれらの補完的な活用」（p.81）という知見と通底していると考えられる。

次に、2名の学習者の事例から、情報源の範囲が広がり、より多様なツールを使い分けるようになった点が挙げられる。例えば、JL1は、翻訳ツールの利用がMOJi辞書に限定されていた初稿から、修正稿ではTencent Cloud、Microsoft EdgeのPDF翻訳、Cider翻訳などへと拡大し、読解・執筆の双方で多様な翻訳支援を活用していた。そして、参照言語も中国語・日本語に加えて英語を扱うようになり、情報理解の幅が広がった。また、JL2は、初稿ではGAIとWeb検索を中心に情報を得ていたが、修正稿では大学図書館などの学術データベースを用いた検索を行い、情報源の信頼性と学術的水準が向上した。

一方、情報活用の効率面では、学習者間に一定の差異が認められた。例えば、JL1は証拠の精度を高めようとする意識を持ちながらも、GAIが出力した事例・論文・数値データをそのまま信頼し、GAI内やWeb上で繰り返し検証を試みた結果、時間をかけたにもかかわらず成果に結びつかない利用が多く見られた。これはGAIのハルシネーションに起因する可能性が高く、出力内容の性質や真偽を見極める批判的姿勢の不足が示唆される。JL2もまた、概念の探索に全修正時間の半分以上を費やしており、学術データベースの選択や検索条件の指定に関する経験・知識不足が作業効率の低下につながったと考えられる。一方、JL3は具体的で明確なプロンプトを設定したことで、GAIの出力を効率的に利用できており、指示の精度が高いほど情報活用の成果が向上することを示唆していた。

5.2 ライティング教育上の示唆

上述した3名の学習者の情報活用の特徴は、16週間にわたるアカデミック・ライティング授業と密接に関連していると考えられる。とりわけ、先行研究の検索方法および批判的な読み方、文献レビューの書き方に関する指導、さらにGAIの活用を支援する活動、学習者自身の研究計画書執筆の実践およびそれに伴う複数回のピア・レスポンスは、信頼できる情報源の獲得や情報の比較・評価を通じた有効な情報の取捨選択を促す要因となったと考えられる。翻訳ツールや参照言語の拡大(JL1)、学術データベースの多用(JL1、JL2)、複数の情報源から得た情報の比較・照合(JL1、JL2)、推論補強から表現の共起や文間のつながりまでの情報活用目的の広がり(JL3)は、学術データベースやGAIの利用を重視した授業内容、教師のフィードバックやピア・レスポンスを活かした授業活動に支えられたもの

である。その実践の中で、学習者は、比較・吟味・評価を経て自らの文章に適切に統合する姿勢も培っていたと考えられる。このような推察は、AIツールや Web リソースといった情報源の活用を支援する活動は受講者の総合的な情報活用能力の向上に寄与したとする楊他（2025）の分析結果とも整合的である。ただし、本稿の分析対象は限定的であることから、5.1 で考察した情報活用の効率面における学習者間の差異に見られるような個人差も、結果に影響している可能性も否定できない。

学習者の情報活用の変化からは、今後のライティング教育において、デジタル時代に対応した情報リテラシーを育成することの重要性が示唆される。具体的に言えば、第一に、GAI の仕組みを理解し、主要な学術データベースの特徴を把握したうえで、検索スキルを高める必要がある。GAI が出力した、実在しない文献情報や数値データなどの検証に過度な時間を費やした JL1 の事例、明確なプロンプトやフィードバック依頼で効率的な GAI 情報活用を図った JL3 の事例、最も直接的・適切なデータベースを選定せずに探索を進めたことによる情報検索の非効率化、キーワード抽出および検索条件の工夫の不足が観察された JL2 の事例からは、今後、GAI の出力の仕組み、または常用される各学術データベースの構造や特徴を理解したうえで、プロンプト設計、検索キーワードの精選、検索条件の工夫を通して、情報の信頼性と検索効率を高める情報検索の力を育成することが求められる。

第二に、今後のライティング授業では、GAI や AI 翻訳の利便性を前提としつつも、それらを限定的かつ補助的に活用する方略を明確に位置づける必要がある。言語学習者にとって、語彙・文法・語用の適切さを判断しながら思考と表現の試行錯誤を重ねる過程こそが、思考力と言語運用能力を発達させる基盤となる。JL1 の事例に見られるように、学習者が翻訳機能を頻繁に用い、異なる言語間での自動変換を繰り返すことは、短期的には理解や表出の効率化に寄与する一方で、思考と表現の試行錯誤を弱める恐れがある。さらに、JL1 および JL2 のように短時間で複数の検索ページを切り替え、情報を断片的に閲覧する行動は、情報収集の速度を優先するあまり、内容の吟味や批判的読解を十分に伴わない可能性もある。GAI の頻用によって認知的オフローディングが増加し、学習者の批判的思考能力の発達を阻害する恐れも指摘されている（Gerlich 2025）。したがって、利便性のみに依存した情報利用が、言語習得および思考形成の過程を損なう危険性に対して十分な警戒が求められる。

6. おわりに

本稿は、日本語学習者がどのように情報を獲得し、それをどのように選択・取り込んでいるのかを明らかにすることを目的とした。具体的には、日本語専攻課程に在籍する3名の学習者を対象に、ライティング授業の開始時に行った意見文の執筆過程および授業終了時の修正過程を記録したデータを分析した。その結果、次の3つの特徴が示唆された。①情報活用の目的が多様化し、その目的に応じて複数の情報源を連動させ、情報を比較・照合する利用が顕著になったこと、②情報源の範囲が広がり、より多様なツールを使い分けるようになったこと、③情報活用の効率面において学習者間に一定の差異が認められたことである。分析結果に基づき、日本語学習者の情報活用の特徴を考察し、ライティング教育上の示唆について論じた。

ただし、本研究の分析対象は3名に限られており、得られた知見を広く一般化するには慎重な検討が必要である。また、本稿で扱ったデータは執筆過程を反映する録画資料であり、情報活用行為に内在する学習者の複雑な認知的側面までは分析対象としていない。さらに、意見文執筆における情報活用の傾向は、レポートや論文といったジャンルにおいても同様に見られるかどうかは明らかではない。今後は、これらの点を踏まえ、対象者数の拡充や、情報活用の認知面の分析、執筆ジャンル間の比較などについて、さらに検討を深めていきたい。

附記

本稿は、中国国家社会科学基金一般項目(22BYY191)の助成を受けて実施したものです。データ整理にあたっては、中山大学外国語学院修士課程の劉濱娜氏、黃詩瑤氏にご協力いただきました。併せて感謝申し上げます。

注

(1) 授業スケジュールの詳細については、楊他(2025)を参照されたい。楊他(2025)では、6名の当該授業の受講者へのインタビューをデータとして、研究計画書執筆におけるAIツールの活用実態が、Webリソースとの比較を交えて分析されている。それに対して、本稿は、実際の執筆プロセスに着目し、当該授業の開始時に行った意見文の執筆過程および授業終了時の修正過程を記録した資料をデータとして、受講者の情報活用の特徴・変容を分析する。なお、本稿で分析対象とするJL1～JL3は、楊他(2025)における分析対象者の番号とは一致しない。

参考文献

- 文秋芳・梁茂成 (2024) 「人机互动协商能力：ChatGPT 与外语教育」『外語教学与研究』 Vol.56, No.02, 286-296.
- 青山玲二郎 (2024) 「香港の日本語学習における新しいテクノロジーの活用—テキスト生成 AI と拡張現実技術の可能性を探る—」『日本学刊』第 27 号, 36-50.
- 甘利実乃 (2024) 「対話型生成 AI を活用した日本語作文教育の可能性」『日本語教育方法研究会誌』第 31 巻第 1 号, 68-69.
- 大島弥生・石毛順子 (2024) 「日本語課題文章作成時の過程と意識は Web 検索・言語生成 AI 使用の有無によってどう異なるか」『専門日本語教育研究』第 26 号, 43-50.
- 佐渡島紗織 (2014) 「アカデミック・ライティング教育と情報リテラシー」『情報の科学と技術』第 64 巻第 1 号, 22-28.
- 谷野圭亮 (2025) 「生成 AI を活用した英語ライティング教育支援ツールについて」『人間文化研究』第 22 号, 223-231.
- 大工原勇人 (2024) 「『クラスメート』は生成 AI—IX (超上級) レベル日本語文章表現クラスの実践報告—」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 21 号, 39-55.
- 福山佑樹 (2025) 「アカデミックライティング科目受講開始時における大学生の生成 AI 利用に対する認識」『日本教育工学会研究報告集』第 2 号, 274-278.
- 李在鎬・加藤恵梨・堀恵子・村田裕美子・毛利貴美 (2023) 「ChatGPT の評価観点と人間の評価観点の比較—計量テキスト分析の手法を用いた分析—」『第 34 回第二言語習得研究会 (JASLA) 全国大会予稿集』, 37-42.
- 楊秀娥・劉濱娜・黃詩瑤 (2025) 「日本語学習者のアカデミック・ライティングにおける AI ツールの活用実態—Web リソースとの比較を兼ねて—」『専門日本語教育研究』第 27 号, 75-82.
- 吉岡敦子 (2007) 「インターネット情報検索における知識構築を促進させるメタ認知の検討」『日本教育工学会論文誌』第 31 巻第 2 号, 115-123.
- 山本岳洋・山本祐輔・藤田澄男 (2020) 「信頼できる情報獲得に対する心がけとウェブ検索行動の分析」『情報処理学会論文誌データベース (TOD)』第 13 巻第 2 号, 19-33.
- Gerlich, M. (2025). AI Tools in Society: Impacts on Cognitive Offloading and the Future of Critical Thinking. *Societies*, Vol.15. <https://doi.org/10.3390/soc15010006>
- Su, Y., Lin, Y. & Lai, C. (2023). Collaborating with ChatGPT in Argumentative Writing Classrooms. *Assessing Writing*, Vol.57, Article ID: 100752. <https://doi.org/10.1016/j.asw.2023.100752>
- Zou, M. & Huang, L. (2024). The Impact of ChatGPT on L2 Writing and Expected Responses: Voice from Doctoral Students. *Education and Information Technologies*, Vol.29, No.11, pp.13201-13219. <https://doi.org/10.1007/s10639-023-12397-x>